

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	1990100024		
法人名	社会福祉法人 ひかりの里		
事業所名	グループホーム めだかの学校 悠ゆう		
所在地	山梨県甲府市武田2丁目8-17		
自己評価作成日	平成24年11月15日	評価結果市町村受理日	

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	http://www.kaigokouhyou.jp/kaigosip/Top.do?PCD=19
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	山梨県社会福祉協議会		
所在地	甲府市北新1-2-12		
訪問調査日	平成24年 12月7日		

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

同敷地内に小規模多機能型居宅介護事業所が併設されている。2階建ての民家を改修したホームで家庭的な雰囲気があります。2階へは階段を使うため生活の中でのリハビリが来ています。
 同法人内の児童養護施設が近くにあり、日々の生活の中で子供の姿や声を聞く生活がある。また、児童と一緒に昼食を共にしたり、買物や外出・散歩する機会も多くあります。職員と少人数で個別外出したり、近くにある同法人内のグループホーム入居者との交流も盛んで外出や料理を作る機会や、合唱を練習し年1回地区の文化祭で発表をしている。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

武田通りに近い住宅地にある。2階建ての民家を改修して利用者9名が家庭的な雰囲気の中、生活している。甲府駅や買い物に便利なスーパーもあり、駅前広場や県立図書館など外出支援の取り組みにも反映できる。武田通りでの信玄公祭りや山梨大学のパレードも楽しむことができる。行事を介して地域との関わりも出来ている。法人は“老幼一体”の事業を展開しており、近隣の児童擁護施設から、月、水、金と児童の訪問があり交流をしている。昼食時も話しがはずみ、楽しく和やかに過ごしている。利用者が子供の騒がしさを注意したり、子供が利用者を労ったりお互いが関わり合うことで良い影響になり、家庭的な日常生活を送っている。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1～55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印		項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印	
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○	1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらい 3. 利用者の1/3くらい 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○	1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57	利用者職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○	1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○	1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○	1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、生き活きと働いている (参考項目:11,12)	○	1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている (参考項目:28)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない				

自己評価および外部評価結果

事業所名

グループホーム めだかの学校 悠ゆう [セル内の改行は、(Altキー)+(Enterキー)です。]

自己	外部	項目	自己評価(実践状況)		外部評価	
			ユニット名()	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容	
I.理念に基づく運営						
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	その人の生きてきた過程と尊厳を大切に、安心して笑顔で過ごせるよう、理念を共有しケアにあたっている。	理念の『安心と尊厳』が色紙に手書きで書かれ玄関に飾られている。会議や日々の会話で確認し、全職員で共有している。そぐわないう行動があった場合はその場で管理者が促している。		
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一人として日常的に交流している	地域行事には声をかけてもらい、積極的に参加している。地域の美容室や商店を利用したり、日々の挨拶等で声をかけることを心がけている。運営推進会議などを通して意見交流に努めている。	自治会に加入しており、回覧板も回ってくる。運動会・餅つき大会・夏祭り・防災訓練など地域の行事にも積極的に参加している。年1回の文化祭には合唱発表をしたり、作品展には書道も出展して、行事の折りには、地域の人が声をかけてくれる。地域から要請を受け、若い職員が行事に協力し地域に溶け込んでいる。		
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	地域包括支援センター主催の認知症教室に参加したり、相談に立ち寄られる方や立ち話時に話しかけてもらう事もあり随時対応している			
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実践、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	運営推進会議においてサービスの状況等について報告し感想・意見を述べてもらっている。会議での状況は職員会議等で報告し、今後のサービスに活かせるように努力している。	運営推進会議は平日の午前中に開催されるため、出席が可能な家族にできる範囲で代表をお願いしている。一年間の行事も会議で決められ、意見や要望が出された時は、職員に伝えサービス向上に活かしている。家族と委員がうちとけて情報を交換する場面も見られ、よい関係作りができています。		
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	日頃から連絡を取り合うと共に、困ったことや疑問点があった場合は市役所へ行ったり電話をし、相談にのってもらっている。	問題が生じたときや困ったときに、電話で連絡を取り合ったり、出向いて行って相談をしている。入居希望の相談が電話で入る場合があり、法人で解決できないときは市に繋げることもあり、より良い協力関係を築いている。		
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	全職員が身体拘束について理解するよう職員研修や職員会議を利用し定期的に指導している。また、日々の業務の中で何気ない声かけ等にも拘束が潜んでいることを周知徹底している。拘束のよるケアは決して良い方向には進まないことを職員に理解してもらっている。	全職員に身体拘束をしないケアを徹底している。月1回の法人の研修にも項目に入れ、学習している。ロールプレイをして、スピーチロックや行動制限など、自分にされてはイヤなことを体験し、利用者の気持ちをj知るとい指導もしている。施錠は防犯のため夜間のみで、階段の防御柵については家族に説明し理解を得ている。		
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	尊厳を大事にし、身体への暴力だけが虐待ではなく、職員言葉かけや対応も虐待につながることを注意して促している。入浴時や健康チェック時、体調の変調に注意し気づくことの大切さを指導している。			
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	家族から制度について相談されたり、制度を利用している入居者もいるので学ぶ機会を持ったが、職員全体が周知・理解は難しい。個々の必要性に応じて本人・家族に適切に導入してもらう事や支援していくことが課題である。			
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又はや改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	家族と密に連絡を取り合い、不安な点や疑問点について納得・理解してもらうよう対応している。利用開始後においても、疑問点や不安な点も出てくると思うのでその都度対応している。			

自己	外部	項目	自己評価(実践状況)		外部評価	
			ユニット名()	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容	
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	面会時や運営推進会議において、家族からあがった意見や要望は、職員会議や日々の業務の中で職員に伝え、改善に取り組んでいる。運営に反映したことや検討していることを、面会時や運営推進会議において報告している。	会議で出された要望等は、管理者で解決できるものはすぐに実施し、ホーム内で解決できないものは法人にあげて改善し、対応している。家族の面会の時には、話し易い雰囲気づくりを心がけている。		
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	日々の業務の中で職員の意見や要望等を聞くように心がけている。また、個別に聞く機会も設ける様に時間をとるように心がけている。可能なものについては、導入している。	利用者のケアに関する事は必要時に話し合い、日々の支援に反映している。職員は管理者に気軽に話せ休暇の調整も自由に申し込んでいる。法人内で2~3か月間他の事業所を学ぶ交流研修はあるが人事異動は少ない。理事長はほぼ毎日来所しており、日々の状況はその都度報告している。		
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	休み希望や職員の勤務可能な条件等も考慮し勤務表を作成している。 能力ややる気に応じた昇給も行っている。			
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	年5回の内部研修会や月1回の職員研修会を行い知識や技術の向上に努めている。外部の研修にも参加出来る様、案内を周知したり、必要に応じて参加要請している。学んだことを報告してもらい職員間の学びの機会としている。			
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	法人内にいくつかの施設があるので、交流・研修は積極的に行っている。他施設との相互訪問も取り入れ情報交換やサービス向上に努めている。			
II. 安心と信頼に向けた関係づくりと支援						
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	入所前に可能な限り自宅などに訪問し顔合わせをしている。また、家族や身近の方に接し方や生活について聞き、入居後顔を合わせた時安心してもらえるような声かけなどの対応を心がけている。			
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	家族と密に連絡を取り合い困っている事・不安に思っている事に耳を傾け状況を理解し安心してサービスを利用出来る様に心がけている。また、家族の思いを受け止め、助言や支援に努めている。			
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	本人や家族の話を聞き、その方の望んでいる支援を広い視野を持ち適切なサービスが受けられる様また、誤解や不安を招かないよう話し合う機会を持つように心掛けている。			
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	家庭的な雰囲気の中、自身で出来ることは出来る限りして頂き時には娘・息子のようにお互い叱咤激励するような、和やかな関係作りが出来ている。			

自己	外部	項目	自己評価(実践状況)	外部評価	
			ユニット名()	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	家族や本人にしかわからない思いもあるため、その関係性を崩さないよう少しでも共有させていただき支えられたらと思っている また、苦しい時こそ話してもらえ一緒に考え力になれるようになっていきたい。そのためにも、信頼関係を築き話せる関係になれるよう努力している。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	本人や家族から話を聞き今まで住んでいた地域に出掛けたり、知人の方や親戚の方にも可能な限り電話や面会に来ていただけるようお願いしている。	利用者の希望で自宅に職員が散歩がてら外出を支援したり、自宅の近所の方が来訪してくれることもある。また利用者一人ひとりの要望に沿った個別の外出支援をしている。家族の協力を得て、週1回の帰宅、外泊、墓参りなどを支援している。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	家庭的な雰囲気や大事にし、皆で和気あいあいと話したり、入居者同士で慰め合う、支え合う光景が出来ている。 職員は見守りながら孤立する方がいないよう話しの輪に入れる支援を心がけ皆が楽しく過ごせるよう努めている。		
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	入院や施設入所に伴い契約解除になった後も、必要に応じて家族と連絡を取り合い、困ることがない様相談に乗り支援している。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	一人ひとりと話しを聞く機会を日々の生活の中で見つけ行っている。本人の意向がはっきり聞けない場合は家族に協力してもらったり、行動や何気ない会話の中から見つけ出すよう考え支援している。	ほとんどの利用者が会話や伝達は行えるが、意志疎通が困難な場合は、職員が話しかけたり、誘いかけをしたり、毎日の生活の中での様子から職員が察知し、また利用者同士の会話から思いや意向の把握に努めている。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	本人から若い時の話などを聞く機会を設けるようにしている。 困難な場合は、家族から可能な限り話しを聞き把握に努める。 また、面会に来た知人や親戚の方に失礼のない範囲でお聞きしている。話すことを拒否することもあるので、その際はあえて触れない配慮に心がけている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	今までの生活習慣を大事にし、一日の過ごし方を把握するように努めている。職員同士、日々気づいた事や情報を共有しその人の持っている力を奪わず維持し生活していける様心がけている。まずは、出来ないではなく、やっていただくことから始めている。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	月1回の職員会議で話し合い検討している。日々の生活の中で気づいた事や要望に対して、職員がチームとして話し合い共有し、介護計画に反映できるよう心がけている。	介護計画は6か月～1年ごとに作成し、急な体調変化にはその都度見直している。家族の意見は面会時に聞き計画に反映している。職員の意見や気づきなどは月1回の職員会議で聞いており、利用者の現状に合った計画になるよう送りノートなどの引継ぎを確実にしている。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	日々の様子やケアについて記録に残し、気づいた事柄は申し送りノートに記入し、職員間で共有している。 日々変わることなので随時、臨機応変に対応している。		

自己	外部	項目	自己評価(実践状況)		外部評価	
			ユニット名()	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容	
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	臨機応変な柔軟な対応を心がけている。既存のサービス規制に縛られてしまいニーズに応えられないことや難しい現状があるが代替えになることなどを探り対応に取り組んでいる。			
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	地域資源として把握している部分もあるが、入居施設という中で資源活用が難しい場合もある。また、掘り出しきれていない地域資源もあると思うので、広い視野をもち、また情報に耳を傾け安心・安全に暮らせるよう支援していきたい。			
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	入所時に本人・家族よりかかりつけ医を聞いている。家族の協力を得ながら受診している。また、必要に応じて主治医に情報提供を行い、一緒に受診に付き添うなどし、主治医と面識を持ち関係づくり努めている。	かかりつけ医は利用者、家族の意向に基づく。家族関係が途切れないように、基本は家族に受診してもらう。家族に医師宛の利用者の状況を書面で渡し、受診結果の報告をしてもらっている。法人のクリニックや歯科などの専門医には職員が受診支援している。		
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	介護職員には気づきを心がけてもらっており、気づいた事は管理者・看護師に随時、相談・報告し家族と話し合い、適切な受診や介護が受けられるよう支援している。			
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入居者が入院した時は、情報提供を行っている。入院中は連絡を取り合い、退院時にはいつでも対応出来る様相談させてもらっている。退院後の生活が無理なく送れるよう指導してもらっている。馴染みのある病院との関係作りはできているが、まだ関係作りが出来ていない病院については難しく課題が残っている。			
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所のできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	高齢ということもあり、先のことを考え入所時・契約時から本人・家族と意向や希望を話し合うようにしている。家族が誤解せず、理解し受け止めて下さるよう話し合う機会を時折設け、時間をかけ取り組んでいる。また、家族から相談を受けることもあるので常に対応出来る心がけている。また、職員にも終末期についての勉強会も取り入れている。	契約時に終末期について説明をしており、看取りの姿勢はあるが医療が必要となった場合は対応が難しいとの旨を説明している。利用者や家族の意向を大切に、もし看取りの希望があった場合に備え、看取りや終末期の研修を行ったり、法人クリニックとの連携を依頼している。また、職員のメンタル面の配慮も必要と感じている。		
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	内部研修会において職員が講師となり、緊急時の対応・連絡体制を研修している。また、最低でも年1回救急法を日赤講師を招き指導を受けている。			
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	年数回、外出時を利用したり時間をとり避難訓練を行っている。また、職員研修においても起震車や消火器体験も取り入れている。大震災も視野に入れ、備蓄の見直しにも取り組んでいる。消防署の立ち会い訓練の予定に入れ、地域の方にも運営推進会議などを通し協力要請をお願いしている。	消防署立ち会いで1回、訓練後外出レクリエーションをするといった計画のもの1回を含め、年5回訓練を行っている。消火器の取り扱いや連絡体制の確認、夜間想定訓練も行っている。備蓄の確認もしている。職員間にも防災に対する意識が根付いている。地域からも安否確認の声かけをもらうなど、協力体制も築いている。スプリンクラー、直通緊急通報装置も設置してある。	夜間想定防災訓練を行い、少ない職員数で利用者が安全に避難できるように、すでに作成されている職員連絡網を回したり、歩行が難しい利用者の避難方法などを全職員が体験し、身に付けることを期待したい。	
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援						
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	人生の先輩としての尊敬の念を忘れずに、一人ひとりの尊厳を大事にし、プライドや人格を傷つけたりしないよう馴染みの関係を保ちつつ声かけに配慮している。 職員には会議や業務内において、理念に触れ徹底を図っている。	人生の先輩という認識を持ち、配慮ある言葉遣いを含め尊厳ある姿勢でケアに努めている。職員は採用時に説明を受け、毎月の研修でも理念に基づき学習している。プライバシー確保にも管理者が細かな指導をし、職員同士も事務管理に留意している。		

自己	外部	項目	自己評価(実践状況)		外部評価	
			ユニット名()	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	個別に話す機会を設けたり、問いかける様な声かけを行い本人が思いを言えるような環境作りに努めている。職員にも聞く姿勢を持ち意向を聞くよう努めるようにしてもらっている。			
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	その人その人にあつた支援をするよう心がけている。時として、時間や都合でペースに合わせられない場面や状況もあるので、工夫や代わりに出来ることを考えながら支援・対応をしている。			
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	おしゃれや化粧品に興味をもてる会話を取り入れながら、今まで使っていた化粧品を持って来てもらいおしゃれをすることを忘れないよう支援している。定期的に美容カットをしてもらっている。希望によっては美容院へ行き髪を染めやパーマをかけたり、カットをしに出かけている。			
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	一人ひとりの好みや反映出来る様要望を聞いたり、職員に伝え対応している。生活歴を活かし、毎食ごと準備から配膳・片づけを一緒にしている。「私がするわ」と率先してして下さる方もいるため、配慮しつつ役割分担してもらっている。	普段の献立は職員が作成し、自由メニューの日には希望を聞いて献立を決めている。配膳、片付け、ホワイトボードにメニューを書く係、読み上げる係を利用者の力に合わせ担当を決めている。同法人児童養護施設の子供と一緒に食事は利用者の喜びとなっている。		
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	体調や病気を考慮し日々の状態を記録し、職員間で申し送りながら情報を共有しその時に応じた対応をしている。食べる量や水分が足りない時は家族と相談しながら、補助的な食品を足すなど支援している。			
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	毎食後、その方に合わせた口腔ケアを行っている。夜間、義歯は洗浄剤に付けるようにして、清潔・口臭などに配慮している。			
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	個々の排泄パターンを把握し対応している。状況を把握し出来る限り、紙パンツは使用しない対応に切り替えている。	ケース記録や個人排泄チェック表でパターンを把握して排泄支援をしている。利用者全員に見守りが必要で、ほとんどがリハビリパンツ、布パンツの利用であるが、時間帯によりパットの大きさを変えるなど使い心地に配慮した支援を行っている。		
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	排泄パターンをチェックし、早めの対応に心がけている。毎朝、冷たい水や牛乳を飲んでいただくようにしている。薬に頼らずに排泄につながる方も増えてきている。			
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそつた支援をしている	なるべく本人の希望に合わせて入浴出来るように心掛けている。体調や希望に合わせて無理強いはいしない支援をしていくよう努めている。入浴を拒む方には、声かけに工夫をするよう心がけ対応している。	本人の希望に合わせて週3回の入浴を心がけている。拒む場合は無理強いせず、声かけの工夫や会話などで促している。また同性介助にも配慮している。		

自己	外部	項目	自己評価(実践状況)	外部評価	
			ユニット名()	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	休息については、一人ひとりの様子に気を配り、自分から言えない方もいるため声かけに配慮している。夜間においては、早く寝ることを無理強いないよう心がけ対応している。寒い時期には個々の希望にて湯たんぽを使用し安眠に努めている。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	個人ケースに服薬の説明書が綴っており職員が理解しておくようにしている。変動があった場合は申し送りノートによって情報を共有し、気づいた事は記録に残すと共に職員間で伝えるようにしている。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	張り合いや喜びが持てるような生活を心がけている。生活歴を把握し、庭の掃き掃除をしたりとの支援も行っている。気分転換においては、利用者の状況を共有しているので、隣接の小規模多機能や近くの法人施設へ遊びに出掛けるなどしている。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	散歩や近隣施設への行き来は日々行っている。普段行けない場所への外出については、家族にお願いしたり、外レクという形で可能な場所には出かける様支援している。定期的に関に一日外出したり、何日か外泊をされる方もいる。	日々の散歩や甲府駅周辺の広場など、地域の環境を利用して外出支援をしている。大型ショッピングセンターへの買い物外出や、近隣地区の同一法人施設での行事訪問など交流外出も行っている。歩いて近くの理髪店、美容院を利用している。	
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	買物等で職員が付き添うことにより、自分で品物を選び料金を支払い、楽しめる支援をしている。個人で財布を持っている方もいるので、そこから購入することも支援している。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	定期的に電話して下さる家族もいる。その際は一緒に寄り添い本人電話が出来る様支援している。手紙については字を書くことが苦手な方もいて最初から諦めているので一緒に行えるように心掛け支援していく。家族などからの手紙は一緒に読んだり、部屋に飾るなどしている。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	利用者の手作り品を飾ったり手作りの空間づくりに工夫している。限られた空間であるが、民家改修施設を活かし、和風ののれん等で工夫し季節ごとにのれんも変えるなどしたり、季節の飾りに変えたりと心がけている。	民家の住宅を改修しているため、玄関から自宅のような雰囲気がある。共有空間のリビングには加湿器があり健康面に留意している。テレビの周辺にソファや椅子があり、お茶を飲みながら会話を楽しんでいる。壁には利用者の行事写真があり、手芸作品や書道作品も飾られている。居間、キッチン、ダイニングがワンフロアになっており、普通の家庭の雰囲気を感させる。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	限られた空間であるため、一人になれる場が少ないのが現状だが、希望や状況により、職員と居室で話したり、一人で居室にいるなど対応を工夫している。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	居室には馴染みの物を持って来てもらったり、家族との写真を飾りなどし、自室であることを認識でき、居心地の良い空間を作れるよう工夫している。紙パンツなどは、人目にはわからないように置くなどしている。	居室には備え付けのエアコン、ベッド、寝具などがある。自分に使いやすいベッドを持ち込んでいる利用者もいる。2階建ての民家がリフォームされ使われているので、一階3名、二階6名の居室の間取りはすべて違う。整理ダンスやテレビ、家族写真など持ち込んでおり、本人が過ごしやすように工夫されている。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	限られた空間であることで、職員の目が届きやすく身体機能を把握しやすい。狭さゆえの利点を活かし車椅子にたよらず、椅子・ソファなどを頼りに歩こうとする意欲にも繋がっている。階段も逆転発想で日常生活のリハビリとして活用している。		